加藤周一著作集

7

加藤周一著作集

近代日本の文明史的位置

7

加藤周一著作集

近代日本の文明史的位置

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集7（全15巻）
近代日本の文明史的位置
一九七九年七月二〇日　初版第一刷発行

著者　加藤周一（かとうしゅういち）
装幀　池田満寿夫
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区四番町四
電話　〇三（二六五）〇四五一
振替　東京八一九六三九
印刷　明和印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社
定価　一八〇〇円

© 加藤周一　1979　Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

I

日本文化の雑種性　5
雑種的日本文化の希望　30
近代日本の文明史的位置　47
能と近代劇の可能性　77
「近代化」はなぜ必要か　93
「追いつき」過程の構造について　101
内コミと外コミの問題　135

II

現代の社会と人間の問題　155
都市の個性　175

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

日本語 I 204
日本語 II 209
さらば藤純子 214

III

林達夫とその時代 227
単純な経験と複雑な経験 245
内田義彦の「散策」について 254
竹内好の批評装置 268
戦争と知識人 288

IV

日本人の外国観 341

日本人の世界像　362
日本人の死生観　433
あとがき　465
初出一覧　472

加藤周一著作集　7

近代日本の文明史的位置

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

日本文化の雑種性

1

私は西洋見物の途中で日本文化のことを考え、日本人は西洋のことを研究するよりも日本のことを研究し、その研究から仕事をすすめていった方が学問藝術の上で生産的になるだろうと考えた。また日本に昔あった文化、現在日本のいたるところに転っている問題は、西洋の文化や問題よりもつまらないものではなく、却ておもしろい点がある、その点に注意しその点を発展させてゆかなかったのは、それにはそれ相応の理由があるとしても、少くとも私自身の場合には怠慢であったと考えた。私はこれからその怠慢をとりもどす仕事をはじめるつもりだ。昔の日本、また今の日本のどこがどうおもしろいかという具体的な内容は、その仕事の途中で少しずつはっきりしてくるはずである。ここで抽象的な原則論をふりまわしてみてもはじまらない。

しかし西洋見物から日本へかえってきたときに私の考えは原則の上でも少し変った。綿密にい

えば、原則は変らなかったが、日本文化の問題という一般的な面で西洋見物の途中で考えていたことと、かえってから考えたこととの間に、いくらか内容のずれが生じた。そのずれは、日本人は日本人の立場にたたなければならぬという原則、つまり日本の西洋化を目標にして仕事をしても日本の問題は決して片づくまいという私の考えの原則をたてた上で、それでは日本人の立場とは何かというその内容に係っている。西洋見物の途中で私はその内容を西洋の影響のない日本的なものという風に考えた。そう考えたのは西洋の影響が技術的な面を除けば精神の上でも文化の上でもいたって表面的な浅薄なものにとどまっていると考えたからである。私は身のまわりに西洋の街を眺めていた。それは東京の西洋式の街とは似ても似つかぬものである。日本でそれに似たものを想い出すとすれば、そこにだけはながい歴史を負った文化が形となってあらわれている京都の古い軒並を想い出す他はない。街とはかぎらぬ、セザンヌ Cézanne のまねと本物のセザンヌとを比較することは、誰にもばかばかしくてできない相談だろう。西洋見物の途中で日本の絵のことを想い出すとすれば、北斎にさかのぼり、光琳にさかのぼる他はない。日本の風土と古い歴史とに根ざしたものの考え方や感受性、また風俗習慣藝術の全体に対し自覚的にそれをとりあげようとする心の動きがおのずからおこる。もしそういう動きを国民主義というとすれば、私が西洋見物の途中で日本人の立場を考えたときに、その内容は、国民主義的であった。そしてそういう私の考えは、英仏両国に暮している間、英仏両国民の自国の文化に対する極端に国民主義的な態度によって、大いに刺戟されたのである。例はいくらでも報告されているから、ここにはあ

げないが、要するにイギリス的な特色は学問藝術から服装や生活様式の末端にまで及んでいるということ、イギリスの文化は日本でのように医学は外国式で美術はまた別の外国式だが生活様式は日本流だというような混雑したものでないということ、従って何事も軽薄でなくながい歴史を負っていておちついたものだということである。イギリスをフランスにとりかえても、およそ同じようなことがいえる。英仏両国に軽薄な現象がないわけではなく、そういうことはむろん程度の問題だが、少くとも日本と比較する場合に、両国の文化が純粋に伝統的なものによって培われているということは、両国を旅行したことのあるほとんどすべての旅行者の注意することであろう。英仏にもそれぞれちがった形でちがった領域に外国の文化に対する強い好奇心がある。しかしそれは多くの場合に自国の文化にとって欠くことのできない原理を外国にもとめるということではなく、外国との接触によって本来の原理の展開を豊かにするということにすぎない。原理に関しては、英語の文化も、フランス語の文化も、純粋種であり、英語またはフランス語以外の何ものからも影響されていないようにみえる。そして多くの英仏人はそのことを多少とも自覚している。そこから一種の文化的国民主義が発達する。いくらか心理学に趣味をもっている旅行者は当然そういうことに気がつくであろう。従って日本人もまた彼らのように文化問題について国民主義的でなければならぬという結論が出やすい。事実そういう結論は昔から何度も出たし、現に私も西洋見物の間そういう結論に傾いていた。しかしそれはまちがっている——ということが私の場合には、誇張していえば、日本へかえる船の甲板から日本の岸をはじめてみたその瞬間には

っきりしたのである。

日本の第一印象とでもいうべきものはこうであった。海に迫る山と水際の松林、松林のかげにみえる漁村の白壁、墨絵の山水がよく伝えているあの古く美しい日本、これはヨーロッパとは全くちがう世界であるということが一つ、しかし他方では玄海灘から船が関門海峡に入ると右舷にあらわれる北九州の工場地帯、林立する煙突の煙と熔鉱炉の火、活動的で勤勉な国民がつくりあげたいわゆる「近代的」な日本、これはマレーとは全くちがう世界であるということがもう一つ。神戸に上陸したときの印象も全く同じものである。神戸はマルセーユともちがうが、シンガポールともちがっていた。外見からいえばシンガポールの方が神戸よりもマルセーユにちかいが、それはシンガポールが植民地だからであって、シンガポールの西洋式の街はマレー人が自分たちの必要のために自分たちの手でつくったものではない。そういう植民地にとっての問題は、原則としては、はっきりしている。植民地か独立国か、外国からの輸入品か国産品か。もしそういうところで文化が問題になるとすれば純粋に国民主義的な方向でしか問題になりえないだろう。ところが神戸では話がそう簡単にゆかない。港の桟橋も、起重機も、街の西洋式建物も風俗も、すべて日本人が自分たちの必要をみたすためにみずからの手でつくったものである。シンガポールの西洋式文物は西洋人のために万事マルセーユと同じ寸法でできているが、神戸では日本人の寸法にあわせてある。西洋文明がそういう仕方でアジアに根をおろしているところは、おそらく日本以外にはないだろうと思われる。マレーとちがうし、インドとも中国ともちがう。そのちがいは、

外国から日本へかえってきたとき、西ヨーロッパと日本とのちがいよりもはるかに強く私の心をうごかした。西ヨーロッパで暮していたときには西ヨーロッパと日本とを比較し、日本的なものの内容を伝統的な古い日本を中心として考える傾きがあった。ところが日本へかえってきてみて、日本的なものは他のアジアの諸国とのちがい、つまり日本の西洋化が深いところへ入っているという事実そのものにももとめなければならないと考えるようになった。ということは伝統的な日本から西洋化した日本へ注意が移ってきたということでは決してない。そうではなくて日本の文化の特徴は、その二つの要素が深いところで絡んでいて、どちらも抜き難いということそのこと自体にあるのではないかと考えはじめたということである。つまり英仏の文化を純粋種の文化の典型であるとすれば、日本の文化は雑種の文化の典型ではないかということだ。私はこの場合雑種ということばによい意味もわるい意味もあたえない。純粋種に対しても同じことである。よいとかわるいとかいう立場にたてば、純粋種にもわるい点があり、雑種にもおもしろい点があり、逆もまた同じということになるだろう。しかしそういう問題に入るまえに、雑種とは根本が雑種だという意味で、枝葉の話ではないということをはっきりさせておく必要がある。枝葉についてならば英仏の文化も外国の影響をうけていないどころではない。インドや中国の場合にはなおさらであって、日本の文化を特に区別して雑種の典型だという理由はない（インドや中国のことはもう少し調べないと断定的なことはいえないが、私の今までに知るかぎりでは日本の場合と著しくちがうように思われる）。

簡単な例を一つとろう。西洋種の文化がいかに深く日本の根を養っているかという証拠は、その西洋種をぬきとろうとする日本主義者が一人の例外もなく極端な精神主義者であることによくあらわれている。日本精神や純日本風の文学藝術を説く人はあるが、同じ人が純日本風の電車や選挙を説くことはない。そんなことは不可能だからであり、日本風といわれるものは常に精神的なものばかりである。現に日本の伝統的文化をたたえるその当人が自分の文章を毛筆ではなくてペンでかき、和綴じではなくて西洋風の本にこしらえ、その本の売れゆきについては、イギリスで典型的に発達し、日本では「ゆがめられた」といわれるかの資本主義機構の作用を感じている。書斎では和服かもしれぬが外へ出るときは洋服である。つまり日本人の日常生活にはもはやとりかえしのつかない形で西洋種の文化が入っているということになる。政治、教育、その他の制度や組織の大部分も、西洋の型をとってつくられたものだ。くどいようだが、経済の下部構造が「前近代的要素」をひきずりながらもとにかく独占資本主義の段階に達している今日、精神と文学藝術だけが純日本風に発展する可能性があると考えるのは、よほどの精神主義者でなければむずかしいだろう。日本主義者は必ず精神主義者となり、日常生活や下部構造がどうあろうと、精神はそういうものから独立に文化を生みだすと考える他はない。ところが念の入ったことに、そう考えた上で行う議論の材料、つまり立論に欠くことのできない概念そのものが多くは西洋伝来の、和風からは遠いものである。自由とか人間性とか、分析とか綜合とか、そういう概念を使わずに人を説得する議論を組みたてることは、議論の題目によっては不可能であろう。日本の文化の雑

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo